

[原 著]

看護学教員ロールモデル行動自己評価尺度の開発

—質的帰納的研究成果を基盤として—

舟島なをみ* 定廣和香子* 亀岡 智美** 鈴木 美和***

DEVELOPMENT OF SELF-EVALUATION SCALE ON ROLE MODEL BEHAVIORS
FOR NURSING FACULTY
—BASED ON THE QUALITATIVE RESEARCH FINDINGS—

Naomi FUNASHIMA*, Wakako SADAHIRO*
Tomomi KAMEOKA**, Miwa SUZUKI***

要 旨

本研究の目的は、現実適合性が高く信頼性・妥当性を確保した看護学教員ロールモデル行動自己評価尺度を開発することである。

尺度の質問項目作成には、質的帰納的研究の成果である学生が知覚する看護学教員のロールモデル行動を示す35カテゴリを基盤として用いた。また、内容的妥当性の検討に向け、専門家会議とパイロットスタディを実施し、その結果に基づき、56質問項目の5段階リカート型尺度「看護学教員ロールモデル行動自己評価尺度（試作版）」を構成した。さらに、この試作版を用いて全国の看護学教員1457名を対象に本調査を実施した。

本調査から得た有効回答815部に対する項目分析の結果に基づき35質問項目を選定し「看護学教員ロールモデル行動自己評価尺度」を構成した。自己評価尺度のクロンバック α 係数は0.955であり、因子分析の結果は、尺度が質問項目の作成基盤とした35カテゴリを反映していることを示した。これらの結果は、開発した自己評価尺度が信頼性・妥当性を確保していることを示唆した。

Key Words : 看護学教員, ロールモデル行動, 自己評価尺度

I. 緒 言

看護学教員のロールモデル行動¹⁾とは、学生が観察し、共感・同一化を試みる教員の行動であり、学生の看護職者としての態度修得に極めて重要な機能を果たす¹⁾²⁾³⁾⁴⁾。このことは、教員が示すロールモデル行動が看護基礎教育課程の目標達成に関わる教授活動として不可欠な要素であること

を意味し、教員が、自己のロールモデル行動を客観的に確認し、改善、調整することは、学生の看護職者としての態度修得を支援する。

しかし、教員自らが、学生が知覚するロールモデル行動を把握することは困難であり、教員のロールモデル行動に対する自己評価活動をより効果的なものとするためには、学生が実際に観察した教員のロールモデル行動に基づく測定用具を開発する必要がある。

先行研究を概観した結果、看護学教員のロールモデル行動に関する測定用具は、2種類⁴⁾⁵⁾存在した。しかし、これらは、いずれも看護学実習における教員のロールモデル行動に焦点を当てていることに加え、文献検討や研究者の経験に基づいて論理演繹的に開発されていた。

そこで筆者らは、看護学教員のロールモデル行

* 千葉大学看護学部看護教育学教育研究分野
** 国立看護大学校
*** 千葉大学大学院看護学研究科博士後期課程
* Department of Nursing Education, School of Nursing, Chiba University
** National College of Nursing
*** Doctoral Program in Nursing, Chiba University

動を自己評価するための現実適合性の高い尺度開発をめざし、その第1段階として学生が知覚する看護学教員のロールモデル行動を解明する質的帰納的研究を実施した⁶⁾。学生から収集した自由記述を分析した結果、看護学教員のロールモデル行動を表す35カテゴリが明らかになった。本研究は、尺度開発研究の第2段階として位置づき、第1段階において明らかになった35カテゴリに基づき質問項目を作成し、それにより構成した看護学教員のロールモデル行動を測定する尺度の信頼性・妥当性検証を試みる。

II. 研究目的

現実適合性が高く、信頼性・妥当性を確保した看護学教員のロールモデル行動自己評価尺度を開発する。

III. 理論的枠組み

看護学教員のロールモデル行動に関する研究¹²⁾³⁾⁴⁾、質的帰納的研究の成果を基盤に看護職者を対象とする自己評価尺度を開発した研究⁷⁾⁸⁾⁹⁾¹⁰⁾の検討を通して、次の命題からなる本研究の理論的枠組みを構築した(図1)。

①看護学教員のロールモデル行動は、学生が観察し、共感、同一化を試みる行動である。②質的帰納的研究の成果であり学生が知覚する看護学教員のロールモデル行動を示す35カテゴリは、現実適合性の高い尺度開発に向けた質問項目作成の基盤となる。また、当該行動の獲得状況の測定をめざし尺度化された質問項目は、内容的妥当性の検討を通して看護学教員ロールモデル行動自己評価尺度(試作版)を構成する。③項目分析により適切な質問項目を選定し、自己評価尺度を再構成す

る。④信頼性・妥当性の検討を経て、看護学教員ロールモデル行動自己評価尺度は完成する。⑤看護学教員ロールモデル行動自己評価尺度は、教員が自己の行動をロールモデル行動という観点から評価でき、学生にとってのロールモデル行動の獲得を支援する。⑥学生による看護学教員の行動に対する観察、共感・同一化、すなわちロールモデル行動に対する知覚を促し、看護職者として必要な態度修得を促進する。

IV. 研究方法

1. 看護学教員ロールモデル行動自己評価尺度(試作版)の作成

1) 質問項目の作成

理論的枠組みに基づき、学生が知覚している看護学教員のロールモデル行動を示す35カテゴリを基盤に56質問項目を作成した。質問項目は、教員が、授業を中心とした学生との相互行為において示す行動を問い、しかも簡潔な表現¹¹⁾となるよう留意した。また、対象者の質問項目に対する理解と適切な自己評価を促すために、関連する内容が連続するように項目を配置した。

2) 尺度化

尺度タイプには、測定方法が比較的簡便であり、ある程度の段階の差異を評価できる¹²⁾5段階リカート型を採用した。選択肢には、現実の時間的程度量(頻度)測定に適した副詞¹³⁾を用い、「いつもそうである」「わりとそうである」「時々そうである」「あまりそうでない」「全くそうでない」とし、各々に5点から1点を配した。また、各質問項目の合計得点が高いほど、その教員がロールモデル行動となる行動を獲得していることを表す。

3) 内容的妥当性の検討

(1) 専門家会議

看護系大学・短期大学・専門学校に所属する教員5名を専門家として招き、①質問項目の表現の適切性と内容の明確さ、②現実適合性、③追加すべき質問項目の3点について検討を依頼した。会議の結果は、質問項目の明確化に向けた表現の検討、質問項目相互の表現・抽象度の一貫性検討、尺度の回答方法に関する説明加筆の必要性を示した。

(2) パイロットスタディ

専門家会議終了後、便宜的標本である看護学教員41名を対象に実施した。56質問項目からなる自己評価尺度を郵送法によって配布し、25名(回収率61.0%)から回答を得た。質問項目の反応分布を検討した結果は、対象者にとって全

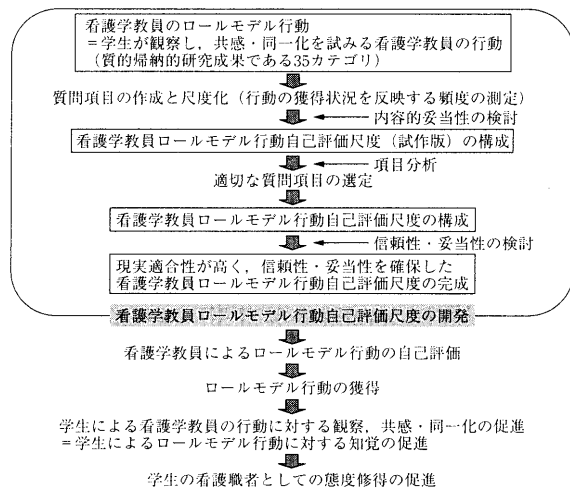


図1 研究の理論的枠組み

質問項目が回答可能であることを示した。加えて「全くそうでない」「あまりそうでない」の選択者が極少数であり、回答が「時々そうである」「わりとそうである」「いつもそうである」に偏りやすく、選択肢の表現を修正する必要性を示した。

(3) 尺度の修正

専門家会議とパイロットスタディの結果を踏まえ質問項目を検討、修正するとともに、尺度の冒頭に日々の行動を思い浮かべて回答する旨を提示する説明文を加筆した。また、選択肢を「いつもそうである」「ほとんどいつもそうである」「わりとそうである」「ときどきそうである」「あまりそうでない」とし、5点から1点を配するように変更した。

以上の過程を経て作成した56質問項目からなる5段階リカート型尺度を「看護学教員ロールモデル行動自己評価尺度（試作版）」と命名した。

2. 本調査

試作版に対する項目分析の実施、適切な質問項目の選定、選定した項目により再構成する尺度の信頼性・妥当性検証を目的とし、郵送法による調査を実施した。

1) 測定用具

測定用具には、試作版及び教員特性調査紙により構成した看護学教員調査票を用いた。特性調査紙は、教員の個人特性を問う自作の質問紙であり、専門家会議とパイロットスタディによりその内容的妥当性を検討した。

2) データ収集方法

層別無作為抽出法により全国の看護基礎教育機関から抽出した大学15校、短期大学29校、専門学校291校の教育管理責任者に往復葉書を用いて研究協力を依頼した。その結果、大学8校、短期大学14校、専門学校151校より承諾を得た。これら総数173校に所属する看護学教員1457名に教育管理責任者を通して調査票を配布し、回収には、返信用封筒により対象者が個別に投函する方法を用いた。データ収集期間は、2001年1月5日から3月5日であった。

3) 分析方法

分析には、統計解析ソフトSPSS10.0J for Windowsを用い、項目分析として、各質問項目の得点分布、項目間相関、I-T相関、質問項目各々を除いた場合のクロンバック α 係数の変化、因子負荷量を検討した。また、この項目分析の結果に基づき適切な質問項目を選定し、自己評価尺度を再

構成した後、その信頼性・妥当性の検討に向けクロンバック α 係数の算出と因子分析を実施した。

V. 結 果

配布した調査票1457部のうち892部が返送され、回収率は61.2%であった。この892部のうち、試作版の全質問項目に回答のあった815部を有効回答として分析した。

1. 対象者の背景

対象者の性別は、女性796名(97.7%)、男性17名(2.1%)、不明2名(0.2%)であり、年齢は、26歳から70歳(平均41.3歳, SD7.9)であった。教育経験年数は、1年未満から40年(平均8.2年, SD6.6)であり、所属する教育機関は、看護専門学校630名(77.3%)、看護系短期大学85名(10.4%)、看護系大学65名(8.0%)、その他(大学・短期大学併設校等)35名(4.3%)であった。

2. 項目分析による質問項目の選定

試作版の1) 得点分布, 2) 項目間相関, 3) I-T相関, 4) クロンバック α 係数の変化, 5) 因子負荷量を検討し、質問項目を選定した。

1) 得点分布

各質問項目への回答は1点から5点、あるいは2点から5点に分布し、平均得点は2.51点から4.50点であった。また標準偏差は0.65から1.14であり、0.70未満であった2項目を分布に偏りがあると判断し削除した。

2) 項目間相関

質問項目間の相関係数は0.06から0.75であり、11項目について他の項目との間に0.70以上の相関係数を認めた。そこで、これら11項目を検討し、表現や内容が類似していた4項目を削除した。

3) I-T相関

各質問項目と尺度の総得点との相関係数は0.364から0.692であり、既に削除した1項目を含む12項目が0.500以下であった。そこで、これら12項目を内的整合性を脅かす可能性が高い項目であると判断し削除した。

4) クロンバック α 係数の変化

尺度全体のクロンバック α 係数は0.966であり、質問項目各々を除いた場合のクロンバック α 係数は0.965から0.966であった。そこで、尺度の内的整合性を脅かす可能性の高い項目がないと判断し、項目を削除しなかった。

5) 因子負荷量

1) から4) の検討の結果、総数17質問項目を削除し、残る39項目により再構成した尺度に対し、主因子法によるバリマックス回転を用いた因子分

析を行った。固有値1以上を基準に抽出する因子数を決定した結果、5因子が抽出された。各質問項目の因子負荷量に着目した結果、全ての因子に対する因子負荷量が0.30未満である1項目、複数の因子に0.30以上の負荷量を示し特定の因子に収束しない3項目を確認した。そこで、これら4項目を削除した。

以上の検討を経て総数21項目を削除し、残る35項目を適切な質問項目として選定した。また、35項目により構成した尺度を「看護学教員ロールモデル行動自己評価尺度」と命名した（以下、自己評価尺度）。

3. 自己評価尺度の得点状況および内的整合性・因子構造

1) 得点状況

対象者が獲得した自己評価尺度の総得点は54点から173点の範囲であり、平均120.2点（SD19.8）であった。Kolmogorov-Smirnovの正規性の検定を行った結果は、総得点が正規分布であることを示した（統計量0.22, $p > 0.05$ ）。

2) 内的整合性

自己評価尺度の内的整合性を表すクロンバック α 係数は、0.955であった。

3) 因子構造

構成概念妥当性の検討に向けて自己評価尺度の因子構造を明らかにするために、35質問項目に対する主因子法によるバリマックス回転を用いた因子分析を行った。固有値1以上を基準に抽出する因子数を決定した結果、5因子が抽出された（表1）。

第1因子は【職業活動の発展を志向し続ける行動】を表す9項目から構成された。第2因子は【学生を尊重し、誠実に対応する行動】を表す8項目から構成された。第3因子は【看護実践・看護職の価値を具体的に示す行動】を表す7項目から構成された。第4因子は【成熟度の高い社会性を示す行動】を表す6項目から構成された。第5因子は【熱意を持ち質の高い教授活動を志向する行動】を表す5項目から構成された。また、各因子の寄与率は13.7%から7.4%であり、累積寄与率は51.7%であった。さらに、各因子を下位尺度とした場合の内的整合性を表すクロンバック α 係数は、0.806から0.897の範囲であった。

VI. 考 察

1. データの適切性

本研究の結果は、自己評価尺度の総得点が正規分布であることを示した。これは、対象者の総得

点が平均値を中心に低得点から高得点の全範囲にわたっていることを意味し、本研究のデータが、尺度の信頼性・妥当性検証に用いることのできる偏りのない適切なデータであることを表す。

2. 自己評価尺度の信頼性・妥当性

1) 信頼性

測定用具が信頼性を確保しているかどうかは、一般にクロンバック α 係数0.70以上¹⁴⁾を基準に判断する。自己評価尺度のクロンバック α 係数は0.955であり、これは、尺度が信頼性を確保していることを示す。

2) 妥当性

妥当性¹⁵⁾には測定用具開発における質問項目の収集・選定過程を問う内容的妥当性、測定用具を用いて実施した調査結果に基づき検討する構成概念妥当性がある。そこで、自己評価尺度の妥当性を次の2側面から検討する。

(1) 内容的妥当性

自己評価尺度の開発過程においては、質的帰納的研究の成果である看護学教員のロールモデル行動を示す35カテゴリを基盤に質問項目を作成するとともに、専門家会議とパイロットスタディを実施し、内容的妥当性の確保に努めた。また、項目分析により適切な質問項目を選定した。これらは、自己評価尺度が内容的妥当性を確保していることを示す。

(2) 構成概念妥当性

構成概念妥当性は、測定用具が実際に何を測定しているかを問う概念である¹⁵⁾。

自己評価尺度に対する因子分析の結果は、尺度が【第1因子：職業活動の発展を志向し続ける行動】【第2因子：学生を尊重し、誠実に対応する行動】【第3因子：看護実践・看護職の価値を具体的に示す行動】【第4因子：成熟度の高い社会性を示す行動】【第5因子：熱意を持ち質の高い教授活動を志向する行動】の5因子から構成されることを明らかにした。これは、自己評価尺度が下位尺度となる5因子により看護学教員のロールモデル行動を測定していることを示す。この5因子は、本研究の質問項目の作成基盤とした看護学教員のロールモデル行動を示す35カテゴリを包含しており、このことは、自己評価尺度が、構成概念妥当性を確保していることを示す。

以上は、自己評価尺度が信頼性・妥当性を確保し、現実適合性が高いことを示唆する。

表1 看護学教員ロールモデル行動自己評価尺度の因子構造

因子および下位尺度 毎のクロンバック α 係数, 得点状況	質問項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
1. 職業活動の発展 を志向し続ける 行動 クロンバック α 係数=0.897, 最低値=9, 最高値=45, 平均値=27.6(SD6.6)	1) 日々の活動の中から新たな研究課題を見出している	0.736	0.041	0.065	0.220	0.140
	2) 研究に前向きに取り組んでいる	0.700	0.090	0.063	0.155	0.156
	3) 最新の専門雑誌に目を通して	0.624	0.213	0.204	0.081	0.185
	4) 看護に関する新しい情報に注意を向けている	0.615	0.301	0.281	0.120	0.146
	5) 学術集会に積極的に参加している	0.611	0.146	0.076	0.132	0.178
	6) 自己の不足部分を補う方法を考え, 実行している	0.611	0.235	0.225	0.195	0.169
	7) 様々なことに関心を持ち, 知識の幅を広げている	0.565	0.254	0.243	0.192	0.192
	8) 職業上の目標達成に向け努力している	0.540	0.307	0.299	0.105	0.166
	9) 看護現象を理解するために理論を活用している	0.412	0.169	0.356	0.211	0.279
2. 学生を尊重し, 誠実に対応する 行動 クロンバック α 係数=0.868, 最低値=10, 最高値=40, 平均値=30.3(SD4.8)	10) 学生の些細な質問にも答えている	0.105	0.748	0.179	0.129	0.188
	11) 学生の話真剣に聴いている	0.107	0.713	0.141	0.205	0.169
	12) 学生がわかるまで説明している	0.179	0.650	0.122	0.119	0.197
	13) 学生のことを親身になって考え, 対応している	0.177	0.613	0.189	0.216	0.155
	14) 必要に応じて授業時間外でも学生に関わっている	0.269	0.483	0.204	0.141	0.038
	15) 学生の要望に迅速に対応している	0.337	0.468	0.188	0.293	0.139
	16) 学生自身の主体的活動を見守っている	0.279	0.459	0.098	0.323	0.143
	17) 自分の誤りに対して誠実に対応している	0.167	0.417	0.215	0.266	0.058
3. 看護実践・看護 職の価値を具体 的に示す行動 クロンバック α 係数=0.882, 最低値=10, 最高値=35, 平均値=25.5(SD4.7)	18) 看護の実例を具体的に示している	0.149	0.214	0.638	0.327	0.223
	19) 看護実践の経験を生き生きと話している	0.109	0.194	0.638	0.322	0.204
	20) 看護職の価値を具体的に説明している	0.356	0.212	0.583	0.195	0.127
	21) 看護職としてはっきりと意見を述べている	0.391	0.269	0.543	0.185	0.126
	22) 看護に対する信念を持って行動している	0.297	0.377	0.538	0.171	0.135
	23) クライアントの状況を的確にアセスメントしている	0.191	0.196	0.426	0.394	0.311
24) 看護技術を手際よく学生に示している	0.156	0.202	0.396	0.365	0.308	
4. 成熟度の高い社 会性を示す行動 クロンバック α 係数=0.806, 最低値=6, 最高値=30, 平均値=20.8(SD3.7)	25) 状況に応じたユーモアのセンスを発揮している	0.169	0.090	0.212	0.621	0.119
	26) 明るく颯爽と振る舞っている	0.167	0.262	0.239	0.528	0.127
	27) 状況に合わせて柔軟に対応している	0.140	0.285	0.184	0.513	0.053
	28) 優しさと厳しさをバランスよく保っている	0.203	0.120	0.240	0.509	0.242
	29) 落ち着いた態度で行動している	0.183	0.319	0.099	0.496	0.168
	30) 礼儀正しく振る舞っている	0.142	0.368	0.117	0.446	0.131
5. 熱意を持ち質の 高い教授活動を 志向する行動 クロンバック α 係数=0.870, 最低値=5, 最高値=25, 平均値=16.0(SD3.5)	31) 内容に確信を持って教授活動を展開している	0.313	0.209	0.240	0.195	0.688
	32) 教材を効果的に使用している	0.374	0.189	0.188	0.270	0.638
	33) 十分な準備をして授業(講義・演習・実習)に臨んでいる	0.278	0.238	0.171	0.105	0.611
	34) 学生が学習しやすいように環境を整えている	0.329	0.284	0.194	0.337	0.510
	35) 学生の反応を確認しながら授業を進めている	0.227	0.367	0.238	0.244	0.382
因子の寄与率 (%)		13.749	12.274	9.161	9.052	7.436
累積寄与率 (%)		13.749	26.023	35.184	44.236	51.672

Ⅶ. おわりに

本研究は、35質問項目5下位尺度からなる看護学教員ロールモデル行動自己評価尺度を開発した。この尺度を用いて看護学教員のロールモデル行動の獲得状況を解明することは、今後の重要な課題である。また、尺度の信頼性をさらに高めるために再テスト法を用いて安定性を確認することも課

題である。

引用文献

- 1) 本郷久美子, 舟島なをみ, 杉森みど里: 看護学実習における教員のロールモデル行動に関する研究, 看護教育学研究, 8(1), 16, 1999.
- 2) 坂井恵子, 近江和恵, 松田静子, 井上博子,

- 門田いく江, 高田峰子, 今江美智子: 看護学生の臨床実習成果にかかわる要因分析, 第21回日本看護学会集録—看護教育—, 275-278, 1990.
- 3) 門脇千恵, 笠井勝代, 徳本ルリ子, 矢野糸枝, 越智文香, 奥谷幸子, 片山美代子, 松木悠紀雄: 臨床実習における「やる気」の要因分析, 第26回日本看護学会集録—看護教育—, 78-81, 1995.
- 4) Dotan, M., Bergman, R., Eckerling, S., Shatzman, H.: Role models in nursing, NURSING TIMES FEBRUARY 12, 55-57, 1986.
- 5) Rauen, K.C.: The clinical instructor as role model, Journal of Nursing Education, 33-40, August, 1974.
- 6) 松田安弘, 本郷久美子, 中谷啓子, 三浦弘恵, 横山京子, 廣田登志子, 鈴木美和, 亀岡智美, 定廣和香子, 舟島なをみ: 看護学教員のロールモデル行動に関する研究, 千葉看護学会誌, 6(2), 1-8, 2000.
- 7) 鈴木純恵: 測定用具「患者特性に基づくケアの自己評価尺度 (SES of NP)」の開発に関する研究, 平成7年度 千葉大学大学院看護学研究科博士論文, 1996.
- 8) 島田理恵, 定廣和香子, 舟島なをみ, 杉森みど里: 看護の対象理解に関する自己評価尺度開発における初期的研究, 看護教育学研究, 9(1), 26-39, 2000.
- 9) 定廣和香子, 舟島なをみ, 亀岡智美: 看護の対象理解に関する自己評価尺度の開発—信頼性・妥当性の検証—, 第19回日本看護科学学会学術集会講演集, 104-105, 1999.
- 10) 舟島なをみ他編: 看護学教育評価論, 文光堂, 29-53, 2000.
- 11) 続有常他編: 心理学研究法9 質問紙調査法, 東京大学出版会, 117, 1975.
- 12) 肥田野直編: 心理学研究法7 テストI, 東

京大学出版会, 1, 1972.

- 13) 織田揮準: 日本語の程度量表現用語に関する研究, 教育心理学研究, 18(3), 166-176, 1970.
- 14) Polit, D.F. et al.: Nursing Research: Principles and Methods 6th ed., J.B. Lippincott Company, 417, 1999.
- 15) 堀弘道他編: 心理尺度ファイル—人間と社会を測る—, 垣内出版株式会社, 641-643, 1996.

Abstract

The purpose of this research was to develop Self-Evaluation Scale on Role Model Behaviors for Nursing Faculty, which had satisfactory reliability, validity, and fittingness. Fifty-six items were made based on 35 categories. The 35 categories were the findings of the previous qualitative research, and showed role model behaviors of nursing faculty perceived by nursing students. Expert panels discussion and pilot study were conducted to establish content validity. Then, Self-Evaluation Scale on Role Model Behaviors for Nursing Faculty as the trial version, which was 5-point Likert Scale with 56 items, was constructed. Using the trial version, data was collected. The trial version were distributed to 1457 nursing faculties. The valid answers were 815, and they were analyzed. The 35 items were selected based on the results of item-analysis, and the scale as the item-selected version were constructed. Coefficient alpha of the item-selected version was 0.955. Factor analysis was used to test construct validity of it. The result showed that the item-selected version reflected 35 categories which was the base of item development, then the construct validity was confirmed.